

序

本学の研究活動一覧も今年度で第26輯の発行を迎えた。

この研究活動一覧の継続的な刊行は学内に競争的環境を生み出し、研究へのモチベーションを高める事に大きく貢献してきた。一方、社会に開かれた大学として本学における研究の質、量を世に問うてきた役割も大きい。

現在、国立大学法人化もその法制化作業が終盤を迎えており、国会審議を経て、平成16年4月から各大学は文字通り競争的環境に突入する事となる。法人化という競争環境の次はとりもなおさず、各国立大学は私学化させるべきであるという政界の一部の力学を否定する訳にはいかない。国家財政の破綻が高等教育という国政の中で、最も重要な聖域にも見直しを迫っているからであろう。

既に始まった少子化社会の中では、特色ある大学だけが生き残れる。このような特色ある大学を作る様、皆で努力したいと考える。競争環境の評価の大きな基準となるのが研究業績である事は論を待たない。第26輯の本誌に託された研究業績には瞠目すべき点が多くあるが、本学研究者が更なる意気込みで研究の質的向上を目指し、大きく飛躍される事を期待している。

学 長 高 久 晃